

さちひろ

発行：天理教狭千廣分教会 〒589-0021 大阪狭山市今熊1-1133 TEL.072-365-2571

E-mail:wai@sachihiro.com url:http://sachihiro.com 編集兼発行人・山口 渡

天理教狭千廣分教会の広報紙

- 1面・みんなの教理入門(6)
- 2面・幸せを届ける言葉
- 3面・連載・おさしづの点滴
- 4面・教会の動き・編集後記

教会の動き

- 朝づとめ：毎朝・6時30分
 - 夕づとめ：毎夕・7時00分
 - 春季大祭：1月21日午後1時30分
 - 秋季大祭：10月21日午後1時30分
 - 月次祭：毎月21日 午後1時30分
 - 春・秋季霊祭：3月22日・9月22日 午後1時30分
- ※教会の場所は、左の地図のマーカー。市立公民館の裏・西側です。



■子どもおぢばがえり回参

今年も子どもおぢばがえりの時期がやってきました。7月26日〜8月4日まで天理市にあります天理教教会本部で開催されます。当教会でも左記の通り団参を計画しております。

記

日時 7月28日(月)・29日(火)
(1泊2日)

集合 7月28日 午前8時30分
場所：狭千廣分教会

解散 7月29日 午後5時頃

内容 おぢば参拝、行事参加(ミラクル大冒険・プール・劇等)

持ち物 ぼうし、水着、着替え、洗面具(風呂道具)

参加費 小・中学生 3,500円
大人 4,000円

幼児(4歳以上) 2,500円
宿泊場所 中河詰所(0743-163-0153)

■天理青年躍進の集い

創立90周年を記念して「天理青年一手一躍進の集い」が、9月15日をかきりにグランキューブ大阪(大阪国際会議場)などで開催されます。

《編集後記》

▼今号も発行が遅れてしまいました。今年も6カ月が過ぎて、半分終わってしまったのです。光陰矢の如しです。▼今年も豊作の梅、処分しきれず知人に配布させてもらいました。庭先に植えたキュウリ・ナスの苗も、みるみるうちに成長して、りっぱな実をつけています。数度収穫して、食卓にあがっています。植えたつもりのないゴーヤもキュウリに負けじと背丈を伸ばしています▼先月は市から民生委員への委託で、一人暮らしの高齢者、寝たきりの方の調査を行いました。わが地域でも増加しているようです。▼そんな話も含めて日々の話題を綴るブログもご覧ください。 <http://sachihiro.co>

☎「#やまさんのブログ」から入れます。

さちひろ 第27号

編集兼発行人・山口 渡
平成20年7月5日
大阪狭山市今熊1丁目1133番地
TEL・072136512571

「みんなの教理入門」連載・6 人間《かしまの・かりもの》

天理大学名誉教授・芹澤 茂

天理教の教えを、天理教学の泰斗・芹澤茂先生がわかりやすく解説します



信仰の初めに聞く教理のなかで、「ほこり」や「いんねん」の教理に次いで話されるのが「かしまの・かりもの」の教理である。

この教理は、広い意味の用法では、およそ三つの事柄を含んでいる。

- 「この世は神のからだ」
 - 「人間は一れつきようだい」
 - 「身の内は神のかしもの」
- 狭い意味のときは、このうち型三番目の教理をさす。

「この世は神のからだ」とは、「この人間の見ている世界が親神様のからだである」という意味で、別の言葉では、「この世の地と天とは実の親であった、その親から人間はできて来た」とも、この世は「天地抱き合せの世界で、人間は親神様の懐(ふところ)にすまわしている」とも言われる。

自然と関係深い労働や職業に従事している人々には、この世が神のからだであることを実感する

機会が多いに違いない。そうでなくても、それぞれの生活の場において、このことを振り返って、この世に生きる生活の意義を考えてみるのは大事なことである。「人間は一れつきようだい」とは、「人間ひとりひとりが親神様のこどもとしてみな兄弟姉妹(きょうだい)である」という意味である。

人間は、この世のことしかわからないために、ひとりひとりがばらばらに生きていて、家族も家庭も今生一代かぎりの仮りのものであると考え、「人はみな他人である」と思っているが、これは心違いで、「他人ということは決してない」と教えられている。

「身の内は神のかしもの」とは、「人間のからだは、親神様が人間に貸しているもの、人間からみれば親神様より借りているものである」という薄味である。

人間は、ふだん何こともなければ、からだが自

由にうごき働くものであるから、自分のからだと思っているが、自分のものでなく、借物なのである。「身はかりもの、心一つか我(わ)がのもの」とも言われるように、自分のものと言えども心だけである。
しかも、自分というものの核(かく)とも言うべき魂についても、「みな同じ魂」と教えられている。
人が出直す(死ぬ)ときは、自分の魂と心を持つてこの世を立ち去り、現神様の世界である「天」に帰る。そしてまた、親神様の守護によってこの世に生まれて来る。



「かしもの・かりもの」の教理は、人間とはいかなるものかを教えられたものである。
この真理を知れば、



人間らしく生きるということとは、この世で「陽氣ぐらし」をするということであるから、そのような生活ができるように、親神様は守護しておられるので、この親神様の守護を日常つねに忘れないようにすることが、「かしもの・かりもの」の真理がわかるためにも大事である。

人間らしく生きる上で、本来の心づかいが間違いないことができるようになるので、ほんこりやいんねんによつてくもらされることもなく、天理にもとることもない。(それ故、この教理は善悪を判断する基準を教えられているともみられる。)

この記事は、昭和59年に「天時時報」紙に連載されたものです。

幸せを届ける言葉

高橋美津志「ちよっとひとこと」

(善本社刊) から

苗木

旅先で、「心に緑を育てよう」という、耳慣れない言葉を聞いた。

昨今は、ゆとりのないトゲトゲした、心の砂漠時代といわれているだけに、殊にこの言葉が心に残った。

それでは、どんな苗木を心に植えれば、素晴らしい緑が育つのかと考えた末、やる気「本気」

働き「思いやりのある働き」

陽気「明るい広い大らかさ」
この苗木を心に植えて、大切に育てたいものだとしみじみ思った。

おさしづの点滴 (5)

神一条事情は五十年前より、学者がしたのでもない、文字から出たのでもない、知恵より出たのでもない。さあく聞いても居るやろ、見ても居るやろ。何も無い処より始め出来た道。
(21・6・6)

【解説】
この道の信仰の元一日は、「五十年前」と言われます。天保九年十月二十六日です。
「天理教教典」、「稿本天理教教祖伝」もここから記述されています。だれも

がよく承知していることであると思えます。すなわち親神が教祖を月日のやしろにもらい受けられたその時、その日から、この道が始まっているのです。

何も無い処より始め出来た道

このおさしづの年月日から計算すると「51年前」の筈ですが、おさしづは「五十年前より」と言われています。明治20年から数えられているのです。教祖が通られた「五十年の道」に注目されているからでしょう。
「何も無い処より始め出来た道」と言われます。教祖が仰せのままに貧に落ちきられて、そこからこの道がはじまったこと、さらには「無い人間ない世界」を捨てられた「元はじまり」も示唆されているものと思います。

「学者」「文字」「知恵」のように人間に備わった力によって始めたのではありません。すべて親神が教祖に入り込まれて創められたのです。
そこは、わたしたちの信仰の原点であります。誤るとんでもないところ

に行つてしまふでしょう。信仰の根であり、元であります。

【おさしづ全文】

卷一 明治二十一年六月六日

清水与之助東京出立帰宅の上伺
さあく世界理は十分の理である。神一条事情は五十年前より、学者がしたのでもない、文字から出来たのでもない、知恵より出たのでもない。さあく聞いても居るやろ、見ても居るやろ。何も無い処より始め出来た道。何でも彼でも通らにやなろうまい。通すで。知らんは一度より無いで。程無う間は無い。しつかり伝えにやならん、通さにやならん。何にも知らん者が皆国々へ弘めさしてある。まあ言うて見よなら敵や。敵が国越えて弘めさしてある。一度伝える、成程、二度伝える、成程、と思うで。皆真実分かり来るのやで。